

# トマス・アクィナスにおける創造の働きの固有性 ——ペトルス・ロンバルドゥスの説をめぐる議論の発展史的考察——

芝 元 航 平

トマス・アクィナスは、何らかの被造物が「奉仕」という役割において創造の働きを共有しえたというペトルス・ロンバルドゥスの説についていくつかのテキストで言及しているが、その議論の内容には少なからぬ変化があるように思われる。本稿は、それらのテキストを検討することによってトマスの理解の変化の哲学的意味を考察する試みである。この問題の解明は、創造が「存在全体の流出<sup>1)</sup>」と語られていることから、トマス哲学における最重要タームの一つである「存在」(esse)の意味内容の解明というより大きな問題に対しても少なからぬ意義を持つと言えるであろう。

トマスがこの問題について主題的に論じているテキストとしては、『命題集注解』(1252-56年)第2巻第1区分第1問第3項および第4巻第5区分第1問第3項第3小問、『対異教徒大全』(1259-64年)第2巻第21章、『能力論』(1265-66年)第3問第4項、『神学大全』第1部(1266-68年)第45問第5項を挙げることができる<sup>2)</sup>。これらのテキストを比較すると、『対異教徒大全』以降、トマスはロンバルドゥスの説を容認する立場から明確に否定する立場へと自らの立場を変更したように思われ、先行研究でも指摘がなされている<sup>3)</sup>。しかし、哲学的に重要

1) “emanatio totius esse”: S. T. I, q. 45, a. 1, c.

2) 著作年代は James. A. Weisheipl, *Friar Thomas d'Aquino: His Life, Thought and Works*, New York, 1974 に従う。また、テキストとしては、『命題集注解』についてはマンドネ校訂版を、それ以外の著作についてはマリエッティ版を用いる。

3) このテーマを取り扱った先行研究としては、Joseph de Finance, *Être et agir: dans la philosophie de Saint Thomas*, 3 éd., Rome, 1965, pp. 142-149 がある。ド・フィナンスは、『対異教徒大全』において、すべてのものが分有する第一の完全性としての存在という新しい考察が見られることを指摘している (p. 145)。ただし、彼は『命題集注解』、『能力論』、

なことは、このような変更が理論的な変更を含むものなのか、含むとすればいかなる変更であるのかということであろう。

われわれはこのような問題意識をもって上述の諸テキストの比較を行うが、その際、存在者と非存在者（無）との間の「距離」という概念に焦点を当てることにしたい。

### 第 1 節 『命題集注解』における議論——「創造する者の側」と「創造されるものの側」との観点の区別による創造の働きの共有の可能性

ペトルス・ロンバルドゥスは『命題集』第 4 卷第 5 区分第 3 章において、ある被造物が「奉仕者」として創造の働きを共有することが可能であったことを次のように述べている。

さらに神は何者かを通して何らかのものを創造することが可能であったのであり、それは創始者としてではなく奉仕者としてのその者を通してであり、その者と共に、その者の内で神は働くのである<sup>4)</sup>。

このテキストは、キリストがどのような洗礼の力 (potestas) を「仕える者たち」(servi) に与えることができたかを論じる文脈の中で語られている。キリストは罪を許す力を「創始者」(auctor) としてではなく

『対異教徒大全』、『神学綱要』、『神学大全』、『分離実体について』の順で考察を進めている（『対異教徒大全』が『能力論』の後に置かれている）。また、『命題集注解』においてトマスはロンバルドゥスとは反対の説に傾いていたが、ロンバルドゥスの権威のゆえに自分自身の責任で論駁しようとはしなかったと述べるなど、理論自体の変化という観点からの考察はあまり見られない。一方、*Aquinas on Creation: Writing on the "Sentences" of Peter Lombard, Book 2, Distinction 1, Question 1*, translated with an introduction and notes by Steven E. Baldner & William E. Carroll, Toronto, 1997, pp. 46-47 では、トマスが『対異教徒大全』以降、流出論の説 (the doctrine of emanationism) が哲学的にはもっともらしいと認める立場から、神が創造の能力を被造物に共有させることが哲学的に不可能であるという立場へと、「この問題について考えを変えた (changed his mind on this question)」と述べられている。また、Leo J. Elders, *The Philosophical Theology of St. Thomas Aquinas*, 1990, Leiden, pp. 295-296; John F. Wippel, *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas*, 2000, Washington, D. C., pp. 580-581 もロンバルドゥスの説に対するトマスの態度の変化について言及しているが、両者とも、初期のトマスはロンバルドゥスへの尊敬の念からその説を否定しなかったという立場を取っている。

4) "Ita etiam posset Deus per aliquem creare aliqua, non per eum tanquam auctorem, sed ministrum, cum quo et in quo operaretur.": IV, d. 5, cap. 3.

「奉仕者」(minister)としての仕える者たちに与えたとされるが、その論拠の一つとして創造においても神が自らの力を他者に与えることが可能であったことが挙げられている。洗礼の場合には、この仕える者たちは洗礼の秘蹟を授ける人間であると言えるであろうが、奉仕者として創造の働きを共有しえたものについてロンバルドゥスはただ「ある者」とだけ語っている。また、ここで語られている「創造」が「無からの創造」を意味しているのかも明確ではない。

トマスは、『命題集注解』の二つの箇所において、このロンバルドゥスの説に言及している。すなわち、(1) 創造について主題的に論じている第2巻第1区分第1問第3項および(2) ロンバルドゥスの当該テキストへの注解である第4巻第5区分第1問第3項第3小問である。

#### (1) 『命題集注解』第2巻第1区分第1問第3項

トマスは『命題集注解』第2巻第1区分第1問第3項において「創造することが神とは異なるものどもに適合するか」という問題を論じている。

同項の主文でトマスは、この問題に関しては、三つの主張があったとする。それは、(1) 第一原因によっては、「第一の原因されたもの」のみが直接的に創造されるのであり、そこから知性、魂、物的な本性という順序で創造の系列が続いていくという新プラトン主義的な説、(2) 創造はいかなる被造物にも適合せず、共有されうることもないという説、(3) 創造は、(現実には)いかなる被造物にも共有されていないのであるが、共有されうるということが可能であったというペトルス・ロンバルドゥスによる説である。トマスはこの説について、ロンバルドゥスを指す「教師」(magister)という呼称を用いて「このことは教師が第4巻第5区分の終わりにおいて付け加えていることである」と述べている。

トマスは(1)の説については、「神に帰せられる誉れを被造物に帰してしまう」ということから「異端のために断罪される」として明確に否定している。それに対して、(2)と(3)の説については、そのどちらも「ある観点から(secundum aliquid)は、自らを裏づける(innatura)ものを持っているように思われる<sup>5)</sup>」と述べている。

その論拠としてトマスは、創造の意味内容には「自らに対していかな

るものも先在していないということ」が含まれているが、このことは「創造する者の側から (ex pars creantis)」と「創造されるものの側から (ex parte creati)」という二つの異なった観点から考えられるということを導入する。

まず「創造する者の側から」は、創造ということは「何らかの先在する原因の活動に基づいて固められているのではない活動」、すなわちあるものが創造の働きを遂行するために、より先なる原因を必要としないような活動を意味している。そして、「第二原因のすべての活動は、第一原因の活動の上に固められている」ことから、「第一原因であることが何らかの被造物に共有されえないように、創造する者であることは、〔被造物〕自身に共有されえない」とトマスは述べている<sup>6)</sup>。

一方、「創造されたものの側から」理解されるならば、「それに対して、事物において何ものも先在していないところのものに、創造は固有の仕方ですべてに属しているものであり、それは存在である<sup>7)</sup>」。すなわち、ここでは創造は、事物の内に見出されるものすべてを産出することとして理解されている。トマスは、このように創造を理解する限りで、創造する働きは被造物に共有されうると考えている。

その〔創造されたものの〕側で創造を解することによって、〔被造物〕そのものにおいて働いている第一原因の力によって、何らかの単純な存在あるいは質料が産出されるということが、被造物に共有されえたのである。そして、この仕方ですべて、哲学者たちは、諸知性体が創造すると考えた。もっとも、〔この考えは〕異端的ではあるの

5) "Utraque autem harum ultimarum opinionum videtur habere aliquid cui innitatur." テキストはマンドネ版による。なお、それ以前のバルマ版においては、「私にはある観点からは真であると思われる」"videtur mihi secundum aliquid vera esse." とより強い表現が用いられている。

6) "Si ex parte creantis, sic dicitur illa actio esse creatio quae non firmatur super actione alicujus causae praecedentis; et sic est actio tantum causae primae: quia omnis actio secundae causae firmatur super actione causae primae: Unde sicut non potest communicari alicui creaturae quod sit causa prima: ita non potest communicari sibi quod sit creans.": *In II Sent.*, d. 1, q. 1, a. 3, c.

7) "Si autem sumatur ex parte creati, sic illius proprie est creatio cui non praexistat aliquid in re, et hoc est esse.": *ibid.*

だが<sup>8)</sup>。

このテキストでトマスは、「共有されえた」と過去における可能性を肯定した上で、それと同じ仕方では諸知性体が「創造する」と考えた哲学者たちの説を異端的な説として批判している。したがって、ここでは、常にそのようにあることとして諸知性体が創造する（したがって、過去においても実際に知性体が創造した）と考えている哲学者たちの説が異端として批判されているように思われる。

## (2) 『命題集注解』第4巻第5区分第1問第3項

『命題集注解』第4巻第5区分第1問第3項では、「協働の能力は神から奉仕者たちにもたらされえたのであろうか」という問いのもとに、その第3小問において、創造する能力が被造物に共有されえたのかが問われている。

その主文においては、「共通的な説」(opinio communis)の名のもとに、創造の能力はいかなる被造物にも共有されえないと語られている。その論拠としては、「端的な存在者と端的な非存在者の間」には無限な距離があるために、創造は無限な能力の業であり、そのような無限な能力は有限な本質の内に存在しえないということが挙げられている<sup>9)</sup>。

トマスがロンバルドゥスの説に触れているのは、第4異論解答と第5異論解答においてである。第4異論解答でトマスは、同書第2巻では言及されていなかった「創出性」(auctoritas)と「創造の奉仕」(ministerium creationis)との区別について説明を行っている。また第5異論解答では、存在者と非存在者との間の距離について論じ、創造には「端的に無限な能力」が必要ではないとしている。

第4異論解答は、「反対的なものは、活動することができない非存在

8) "et ex parte ista accipiendo creationem, potuit communicari creaturae, ut per virtutem causae primae operantis in ipsa, aliquid esse simplex, vel materia produceretur: et hoc modo philosophi posuerunt intelligentias creare, quamvis sit haereticum.": ibid.

9) "communis opinio habet, quod creatio non potest alicui creaturae communicari; quia est opus infinitae potentiae, propter distantiam infinitam quae est inter simpliciter ens et simpliciter non ens, inter quae est mutatio creationis. Potentia autem infinita non habet esse in essentia finita.": *In IV Sent.*, d. 5, q. 1, a. 3, qc. 3, c.

者よりも大きく活動に抵抗する」ので、反対的なものから作り出すことが被造物に委ねられたのであれば、何らかのものを無から作り出す創造の働きは被造物に委ねられえたであろう、という異論に対する解答である。トマスはまず、反対的なものは、それ自体として受動的能力を遠ざけることによって、能動者の働きを妨げるのであるが、無においてはまったく受動的能力が除去されているために、「端的に語るならば、あるものを反対的なものから作るよりも、それを無から作る方がはるかに大きな力に属している<sup>10)</sup>」として、異論の論拠を反駁する。

ここまでのトマスの論述は創造の働きが被造物には共有されえないという、主文で述べられた「共通的な説」に沿ったものである。しかし、続けてトマスは、ロンバルドゥスの説を取り上げ、彼が「創造の奉仕」と「創出性」を区別して前者のみが被造物に共有されうるとしていることから、その説が「共通的な説」と矛盾するものではないことを整合的に説明しようと試みている。

しかるに、教師〔ロンバルドゥス〕は〔命題集の〕書において、被造物に共有されうるのは、創造の奉仕 (*ministerium creationis*) であって、創出性 (*auctoritas*) ではない、と語っているので、もしある者がこの点において彼を保持することを意志とするならば、その場合には、あるものがいかなる先在者からも生じないときに固有に創造されると言えたであろう<sup>11)</sup>。

そしてトマスは、無限な能力としての「創出性の能力」(*potentia auctoritatis*) と、被造物にも共有されうる「創造の奉仕」の区別を、先に『命題集注解』第2巻でも論じた二つの区別に基づいて説明している。

一方、第5異論解答は、「無限な能力を持つことは被造物には委ねら

10) "multo majoris virtutis est facere aliquid ex nihilo quam ex contrario, simpliciter loquendo": *In II Sent.*, d. 1, q. 1, a. 3, qc. 3, ad 4.

11) "Quia tamen Magister in *Littera* dicit quod potest creaturae communicari ministerium creationis et non auctoritas, si quis vellet eum in hoc sustinere, posset dicere quod tunc proprie aliquid creatur quando fit ex nullo praeeistente. Unde patet quod creatio de sui ratione excludit praesuppositionem alicujus praeeistentis.": *ibid.*

れえない」という異論に対する解答である。この異論においては、「存在者と非存在者の間にある無限な距離」がその論拠とされている。トマスはこの異論に対して「それゆえ、これ〔第4異論解答〕に従って、第五に対しても教師に従うとするならば、次の通り言われなければならないであろう<sup>12)</sup>」と述べ、ロンバルドゥスの立場からの解答を試みている。

まずトマスは、自然的な運動においては、そのような距離は能力の絶対的な無限性を必要とすると指摘する。

存在者と非存在者との間の距離は、絶対的には、端的な非存在者から何かを作るものにおける能力の無限性を必要とする。というのも、諸運動において、動かすものの力が両端の間にある距離に対して比例しているということは、その距離から運動が量を受け取っているがゆえに起こるからである。というのも、『自然学』第4巻で言われているように、経路が大きいほど、それだけ運動も大きいからである<sup>13)</sup>。

しかし、続けてトマスは、創造においては「純粋な非存在者は、自体的には創造の端点ではなく、偶有的に〔創造〕そのものに対して関係している」ことから、創造者の能力は、存在者と非存在者の間の無限な距離に比例する必要はないと述べている。

それゆえ、創造者の能力が存在者と非存在者の間にある距離に対して比例しているということではなく、それはただ創造されたもの——それは無限なものではない——に対してのみ比例しているのである。それゆえ、端的に無限な能力が必要とされるのではなく、ある観点で無限な能力、すなわちすべての自然的で質料的な諸能動者のよう

12) “Secundum hoc ergo ad quintum dicendum esset secundum Magistrum”: *In II Sent.*, d. 1, q. 1, a. 3, qc. 3, ad 5.

13) “distantia inter ens et non ens requirit absolute infinitatem potentiae in eo qui facit aliquid ex simpliciter non ente. Quod enim in motibus virtus moventis proportionetur distantiae quae est inter terminos, ideo contingit, quia ab illa distantia motus accipit quantitatem. «*Quanta enim est via, tantus est motus*», ut dicitur in *IV Phys.*”: *ibid.*

に、何らかの規定された質料に伝達されているのではない能力が必要とされるのである<sup>14)</sup>。

このようにしてトマスは、端的に無限なものである神が、被造物に共有されえない無限な「創出性の能力」を持っているという形で、「共通的な説」とロンバルドゥスの説との整合性を見ようとしていると言えるであろう。

## 第 2 節 『対異教徒大全』における議論——「端的に存在すること」に基づく創造の働きの固有性に関する哲学的理解の確立

トマスは『対異教徒大全』第 2 卷第 21 章において、「創造が神の固有の活動であること、および創造することが神のみに属していること」が示されると語っている。

トマスは、創造が神のみに属している論拠として、まず第一に創造がいかなる活動も前提としない第一の活動であることから、それが第一能動者である神に固有な働きであると述べ、さらに第二の論拠として、神が「存在することの普遍的な原因」(universalis causa essendi) であることから、創造は神に固有な活動であると述べている。

このような論拠を支えているのは、第三の論拠において挙げられている、創造によって第一に原因される存在が「端的に存在すること」(esse simpliciter) であるという理解であると思われる。トマスは、「結

---

14) “*Sed in creatione non sic est; quia non ens purum non est per se terminus creationis, sed per accidens se habet ad ipsam: dicitur enim aliquid fieri ex non ente, idest post non ens. Unde creatio non habet quantitatem ex distantia non entis ad ens, sed ab ente quod creatur. Et ideo non oportet quod potentia creantis proportionetur distantiae quae est inter ens et non ens, sed solum ei quod creatur, quod non est infinitum. Et ideo non requiritur potentia infinita simpliciter, sed infinita secundum quid ut scilicet commensurata alicui materiae determinatae, sicut sunt omnia agentia naturalia et materialia.*”: *ibid.* さらにトマスは、無限な距離についても、「存在者の側から」と「非存在者の側から」ということを区別している。トマスは、端的な意味で非存在者から無限な距離を持っているのは神のみであり、有限な存在者については、「非存在者の側から」は無限な距離を持っているが、「存在者の側から」は有限な距離を持っているにすぎないと述べている。そして、創造の能力は「存在者の側から」の距離にのみ関わるのである。“*non est distantia infinita inter ens et non ens ex parte ipsius entis nisi ens sit infinitum; ... Creatio autem non respicit hanc distantiam ex parte non entis, sed magis ex parte entis, quod est creationis terminus.*”: *ibid.*



果はその原因に比例的に対応している」ことから、普遍的な結果は普遍的な原因に対応しているとして、次のように述べている。

したがって、存在することの固有の原因 (*causa propria essendi*) は、神である第一の普遍的な能動者である。しかし、他の諸能動者は、端的に存在することの原因ではなく、人間や白さとして、このものとして存在することの原因である。しかるに、端的に存在すること (*esse simpliciter*) は、何ものも前提しない創造によって原因される。なぜなら、端的に存在するものの外に存在している何ものが存在することはありえないからである。他の諸作出 (*factiones*) によっては、この存在者やあの存在者が生じる。なぜなら、先在する存在者から、この存在者やあの存在者が生じるからである。それゆえ、創造は神の固有な活動である<sup>15)</sup>。

このテキストでは、無から「端的に存在すること」を原因することと、先在する何らかの存在者から「この存在者」を原因することとが区別されている。ここでは「端的に存在するもの」以外には何も存在しえないと語られており、「端的に存在すること」はすべての存在者に適合しているという理解が見られる。

さらに『対異教徒大全』では、「道具的」な能動者による創造の可能性が否定されている。その論拠としてトマスは諸原因の秩序を考えている。トマスは道具的な能動者の例として、のこぎりが木材を切ることによって、製作者が机を作るための道具として使われるという例を挙げている。そのような道具的な能動者は、「他のものの力における能動者」 (*agens in virtute alterius*) であるが、「自らに固有で本性的な何らかの活動を通して主要な能動者の働きを実行している<sup>16)</sup>」のであり、「道具

---

15) “Causa igitur propria essendi est agens primum et universale, quod Deus est. Alia vero agentia non sunt causa essendi simpliciter, sed causa essendi hoc, ut hominem vel album. Esse autem simpliciter per creationem causatur, quae nihil praesupponit: quia non potest aliquid praeexistere quod sit extra ens simpliciter. Per alias factiones fit hoc ens vel tale: nam ex ente praeexistente fit hoc ens vel tale. Ergo creatio est propria Dei actio.”: S. c. G. II, cap. 21.

16) “Omne agens instrumentale exequitur actionem principalis agentis per aliquam

の固有な働きに対応する結果は、主要な能動者に対応する結果よりも生成の道においてより先に存在している<sup>17)</sup>。したがって、もし何らかの道具的な能動者が創造しうるのであれば、「何ものかが、第一の創造者の働きに対応する結果である存在よりも生成の道において先なるものであるような、道具的な創造者の固有の働きによる結果であるというのでなければならぬことになる<sup>18)</sup>」が、それは不可能である。

ところで『命題集注解』では、創造の働きを共有しえた「神の力において」働く「奉仕者」については、それが神の「道具」であるとは述べられていない。したがって、『対異教徒大全』では、「他のものの力において」働くことが「道具」の特質であり、その上で道具の働きによって創造することが不可能とされていることを考えると、トマスがこのテキストにおいて、ロンバルドゥスの説を暗に批判しようとしていることは明らかであろう。

さて、非存在者と存在者の間の距離についてトマスはどのように語っているであろうか。このテーマについては『対異教徒大全』では、第 21 章ではなく、物体が創造しえないことを論じた第 20 章で語られている。

その上、創造することは無限の能力にのみ属している。というのも、何らかの能動者は、現実態からより大きく離れている可能態を、現実態に産出しうるほど、より大きな能力に属しているからである。……それゆえ、先在する可能態がまったく取り去られているところでは、すべての規定された距離の対比は乗り越えられている。そして、そのように、何らかのものを、先在する可能態なしに確立する能動者の能力が、質料から何ものかを造る能動者の能力のために考えられうるすべての対比を超えていることは必然である。しかるに、哲学者によって『自然学』第 8 卷〔第 10 章〕において証明されて

---

actionem propriam et connaturalem sibi...”: S. c. G. II, cap. 15, 975.

17) “Effectus autem respondens actioni propriae instrumenti est prior in via generationis quam effectus respondens principali agenti”: ibid.

18) “Oportebit igitur aliquid esse effectum per propriam operationem instrumentalis creantis quod sit prius in via generationis quam esse, quod est effectus respondens actioni primi creantis. Hoc autem est impossibile: nam quanto aliquid est communius, tanto est prius in via generationis; ...”: S. c. G. II, cap. 21.

いるように、いかなる物体の能力も無限なものではない。したがって、いかなる物体も、何ものかを創造すること、すなわち無から何ものかを作ることはできないのである<sup>19)</sup>。

このテキストでは、可能態・現実態の概念が導入され、さらに『命題集注解』の場合とは異なり、能動者の能力の大きさはそれが引き起こす変化における可能態から現実態への距離に比例していると考えられている。そして、先在する可能態がないところには、可能態と現実態の間の距離同士においてあるような有限な対比はありえないことから、創造には無限な能力が必要とされている。しかし、このテキストからは存在者と無との間の距離が端的に無限であるかについては必ずしも明確ではなく、さらにこの論拠が物体の創造可能性についてのみ適用されていることは、トマスが創造する能力の無限性を端的な無限性として考えていたかについては曖昧な点が残るとも言えるように思われる。このことは、「質料から何ものかを造る能動者の能力のために考えられうるすべての対比を超えている」と言われ、可能態として質料が考えられていることとも関係しているように思われる。なぜなら、質料から何かを造る能力としては、まずは自然的原因である質料的事物の能力が考えられるからである。

### 第3節 『能力論』および『神学大全』における議論

#### ——創造の働きの能力の端的な無限性

『能力論』では、第3問第4項においてこの問題が論じられている。その主文では、ロンバルドゥスの説が「教師」の説として取り上げられている。トマスは、まず「存在を与えること (dare esse) は、そのよ

---

19) “Amplius. Creare non est nisi potentiae infinitae. Tanto enim est maioris potentiae agens aliquod, quanto potentiam magis ab actu distantem in actum reducere potest: ut quod potest ex aqua ignem facere, quam quod ex aëre. Unde, ubi omnino potentia praeexistens subtrahitur, exceditur omnis determinatae distantiae proportio, et sic necesse est potentiam agentis quae aliquid instituit nulla potentia praeexistente, excedere omnem proportionem quae posset considerari ad potentiam agentis aliquid ex materia facientis. Nulla autem potentia corporis est infinita: ut probatur a Philosopho in VIII *Physicorum*. Nullum igitur corpus potest aliquid creare, quod est ex nihilo aliquid facere.”: S. c. G. II, cap. 20, 966.

うなものである限り、固有の力に従っては、第一の原因のみの結果である<sup>20)</sup>」ということをも前提とした上で、「この仕方によって、ある哲学者たちは、第一の諸知性体は、それらの内に実在している第一の原因の力によって、それら〔第二の知性体〕に存在を与える限りにおいて、第二の〔諸知性体〕の創造者 (creatrices) である、と主張した。……しかるに教師は『命題集』第4巻において、このことが被造物に共有されるものであり、〔その被造物は〕創始性としての固有の力によってではなく、道具としての奉仕によって創造すると主張した<sup>21)</sup>」と述べている。したがって『能力論』では、ロンバルドゥスの説が存在を与えることが神の固有の働きであることを前提とした上で説として理解されている。これは、神が存在することの普遍的原因であるという論拠を挙げた上で、道具的なものの創造の働きを否定した『対異教徒大全』での議論の構造と一致していると言えるであろう。

トマスはこの説を、「あるものの作用は、たとえそれが道具としてのそのものに属しているとしても、それ自身の能力から出て来なければならない」が、「あらゆる被造物の能力は有限であるから、何らかの被造物が、創造のために働くことは、たとえ道具としてであっても不可能である」ということに基づいて論駁している<sup>22)</sup>。ここでは創造に必要なとされる無限な力が、あらゆる被造物の有限な能力を越えた端的に無限な力であることが明確に示されている。トマスは、創造に無限な能力が必要である理由を五つ挙げているが、その第一に挙げられているのは、「端的に存在しないこと」と「存在」との間に無限な距離があり、創造

20) "et ideo oportet quod dare esse in quantum huiusmodi sit effectus primae causae solius secundum propriam virtutem...": *De pot.*, q. 3, a. 4, c.

21) "Et per hunc modum posuerunt quidam Philosophi, quod intelligentiae primae sunt creatrices secundarum, in quantum dant eis esse per virtutem causae primae in eis existentem. ... Magister vero in IV *Sententiarum* ponit hoc esse communicabile creaturae non quidem ut propria virtute creet, quasi auctoritate, sed ministerio quasi instrumentum.": *ibid.*

22) "Sed diligenter consideranti apparet *hoc esse impossibile*. Nam actio alicuius, etiamsi sit eius ut instrumenti, oportet ut ab eius potentia egrediatur. Cum autem omnium creaturae potentia sit finita, impossibile est quod aliqua creatura ad creationem operetur, etiam quasi instrumentum. Nam creatio infinitam virtutem requirit in potentia a qua egreditur: ...": *ibid.*

する能力はその距離に比例しているということである。

第一の〔理由は〕、作出するものの能力は、生ずるところのものと、そこから生ずるところの対立的なものとの距離に比例しているということによる。というのは、冷気がより厳しく、そのようにして熱からより離れているほど、熱の働きは、冷たいものから熱いものが生ずるために、より大きな力において存在しているからである。しかるに、端的に存在しないこと (non esse simpliciter) は、存在から無限に離れている。このことは、存在しないことは、限定された各々の存在者からどれほど他の存在者から離れて見出される場所の各々の存在者よりも離れていることから明らかである。それゆえ、全く存在しないものからあるものを作り出すことは、無限な能力に属してでなければ存在しないのである<sup>23)</sup>。

このテキストでは、「端的に存在しないこと」と「存在」との間の距離が無限であるとされているが、その理由としては、「存在しないこと」が、限定された存在者同士の間でありうるどのような遠い距離と比較しても離れているということが挙げられている。ここでは、何らかの有限な二つの存在者がどれだけ離れていても、その距離よりも離れている有限な存在者を考えることが可能であるということ、そして、個々の有限な存在者から「端的な非存在者」すなわち「無」への距離はそれらの距離を超えていることが理解されている。

一方、『神学大全』第1部では、この問題は第45問第5項において論じられている。そこでは『能力論』と同様に、ロンバルドゥスの説が、「このものやそのようなものである限りではなく、絶対的に存在すること (esse absolute) を産出すること<sup>24)</sup>」である創造が神の固有な働きで

23) “*Prima est ex hoc quod potentia facientis proportionatur distantiae quae est inter id quod fit et oppositum ex quo fit. Quanto enim frigus est vehementius, et sic a calore magis distans, tanto maiori virtute caloris opus est ut ex frigido fiat calidum. Non esse autem simpliciter, infinitum ab esse distat, quod ex hoc patet, quia a quolibet ente determinato plus distat non esse quam quodlibet ens, quantumcumque ab alio ente distans invenitur; et ideo ex omnino non ente aliquid facere non potest esse nisi potentiae infinitae.*”: ibid.

24) “*Producere autem esse absolute, non in quantum est hoc vel tale*”: S. T. I, q. 45, a. 5.

あることを前提とした説として理解されている<sup>25)</sup>。その上で、「創造する神に固有な結果であるものは、他のすべてのものどもに前提されているもの、すなわち絶対的に存在すること (esse absolute) である<sup>26)</sup>」ことから、「神の力において働く」道具因であっても、自らの固有な何かを通じて創造の働きに関与することは不可能であると述べられている。

また、創造に無限な能力が必要であることに関しては、トマスは第3異論解答において、「何らかの有限な結果を創造するということは無限な能力を確証するものではないが、そのものを無から創造するということは無限な能力を確証するのである<sup>27)</sup>」と述べている。その理由としてトマスは、可能態がまったくないのと、何らかの可能態があることの間には全く対比が存在しないことを挙げているが、そこでは「質料」の語は語られず、さらに「非存在者の存在者に対するいかなる対比も存在しないように、まったく可能態がないことの何らかの可能態——自然的能動者の力はそれを前提する——に対するいかなる対比も存在しない<sup>28)</sup>」と述べられていることから、先に検討した『対異教徒大全』のテキストとは異なり、可能態・現実態が明確に存在のレベルで考えられているように思われる。

『神学大全』での議論は基本的には『能力論』と同じ理解に基づいていると言えるであろう。しかし『神学大全』では、創造によって産出されるものが「有限な結果」であり、その有限性は創造の能力の無限性を示すものではないことが明確に述べられている。したがって『神学大全』では、創造によって「端的な非存在」すなわち「無」から原因される「絶対的に存在すること」が、個々の有限な被造物において見出される存在であるということがより明確な形で示されているように思われる。

c.

25) "licet creatio sit propria actio universalis causae, tamen aliqua inferiorum causarum, in quantum agit in virtute primae causae, potest creare.": ibid.

26) "Illud autem quod est proprius effectus Dei creantis, est illud quod praesupponitur omnibus aliis, scilicet esse absolute.": ibid.

27) "Quamvis igitur creare aliquem effectum finitum non demonstrat potentiam infinitam, tamen creare ipsum ex nihilo demonstrat potentiam infinitam.": S. T. I, q. 45, a. 5, ad 3.

28) "quia nulla proportio est nullius potentiae ad aliquam potentiam, quam praesupponit virtus agentis naturalis, sicut et non entis ad ens": ibid.

## 結 語

われわれは以上のテキストの検討において、トマスが(1)『命題集注解』では、創造者の能力は必ずしも存在者と非存在者の間の無限な距離に比例している必要がないことから、創造には端的に無限な能力が必要とされるわけではなく、天使が「奉仕」という仕方でも創造の働きを共有しえたと考えていたこと、(2)『対異教徒大全』では、「端的な存在」の洞察に基づいて創造が神のみに属することが哲学的に論証されており、創造者の能力が存在者と非存在者の距離に比例すると考えられているが、創造の働きの能力に必要な無限性が、端的な無限性であるのかという点については不明瞭であること、そして(3)『能力論』および『神学大全』では、『対異教徒大全』での理解に加えて、創造の働きには端的な無限性が必要とされることが明確に語られていることを確認した。

トマスは、『命題集注解』において「各々の事物の存在と、その各々の部分の存在とは、直接的に神からある。われわれは信仰に従って神以外の何者も創造しないと信じるからである<sup>29)</sup>」と述べており、神のみが創造によって被造物の存在を直接に原因しているという「事実」に関する主張は終始一貫している。しかし、このテキストから明らかなように、同書ではあくまで「信仰によって」それが主張されており、哲学的に論証されうるものとしては考えられていない。したがって、われわれが序論での問いに答えるならば、『対異教徒大全』以降のトマスは、キリスト教的な創造論を、神があらゆる被造物を直接に創造したという点に関して哲学的に基礎づけようと考えるようになったという理論的変更を行ったと言えるであろう。そしてこのことは、トマスが、被造物において無に対して区別されたものとして見出される「存在」が、それ自体としては限定性を含まない「端的に存在すること」あるいは「絶対的に存在すること」であるという哲学的理解を——明確な形では『能力論』や『神学大全』において——獲得したということの意味しているように思われる。

---

29) “esse cujuslibet rei et cujuslibet partis ejus est immediate a Deo, eo quod non ponimus, secundum fidem, aliquem creare nisi Deum”: *In I Sent.*, d. 37, q. 1, a. 1, c.